

続「金木犀の香る街で」 幻の芳賀路へ

C12 ってのはすごいだぞ！小山から友部へ向かう水戸線の車中、猪島は頬を紅くして語っていた。「缶が小さいし側面の除煙板もないから、横から見るとボイラーの下の隙間から向こうが透けて見えて、その不安定さがたまらなく格好良いんだ。昔は足尾線なんかで重連で貨物輸送なんかもしていたんだぞ！」

中学に上がった時分、鉄道好きな猪島に連れられて私は初めて蒸気機関車が牽く列車というものに乗りに行った。東京から普通列車での日帰り旅行で蒸機列車に乗りに行くなら秩父か真岡だが、小さくてもスタイルの良さで言えば断然 C12 だ、というのが猪島の持論で、私はそれにそうだとも違うとも言うだけの知識を持ち合わせておらず、ただただついて行ったのだった。思えば猪島はいつもそうやって私を引っ張って行った。元々好きだった美術の道に最終的に進みたいと思ったのも彼の描く油絵の光の捉え方に惹かれたからだったし、後年自分の曾祖父が画家であったということを知られるわけだが、早熟だった彼の背を追うことなしに今の私はできあがっていないだろう。

だが、大学に進んでからの猪島は徐々に遠い存在になっていった。私は地元関東の、彼は関西の美大に進んだ。私は大学で出会ったデザインの分野が腑に落ちるところがあり卒後は雑誌のデザインの職を得、今に至っている。猪島と最後に会ったのは大学4年次が最後だ。卒業制作の展示を見るためにわざわざなけなしのバイト代をはたいて東京までやってきてくれた彼は、私の作品の前に20分ほど立ち尽くしじっと見つめると、最後に一言「商業的やなあ」と、どこか寂し気な、蔑んでいるわけでもなければ、かと言って心にもない賛辞の言葉を投げるといふ媚も感じられない、誰に聞かれるともなく漏れてきたというような一言を置きざりに、それ以上は何も言わずに私を喫茶店に誘った。ウィナーコーヒーを1杯頼んだ彼はしばらくコーヒーに口もつけず、クリームとコーヒーが完全に溶け合って、さらに少しばかり冷めてしまった頃になってはたと顔を上げ、「俺にはやっぱり洋画しかないんだ。なあ、俺はものになると思うか？」と問うてきたのである。私はどう答えたのであろうか。正直彼のデッサン力は人並み外れていたし、その筆致には人を魅了するものがあると思っていた。ただ洋画の良し悪しについては私にもそれ以上は分からない。「芳也の絵は昔から大好きだ。しかもこのところまた画力を上げてきたじゃないか。大丈夫だよ。」そんな分かったような分からないような答えをしたように思う。黙って私の手に視線を落とした後、そっか、ありがとな、と一言言い置いて会計を済まし、彼は関西に帰っていった。その後しばらく音信が途絶えていたがお互い二十代も最後の年となる今年はじめ、突然彼から電話があった。今どこで何をやっているんだ？と聞いても彼は答えず、「いやまあ、何もないし、どこにいたって住むところも何も…。それより今日は恵二の声が聞けて良かったよ。ありがとな。」と、一寸気がかりな言葉を残して通話はブツンと切れた。後で彼と同学の知り合いから聞いた話では大学の同窓会でも数年前から連絡が取れておらず音信不通なのだという。

「タンク SL なら断然真岡だ！ほら、もうそこに駅が見えてきたぞ！」下館駅のホームに入線する水戸線の中距離電車の窓を開け、中学生の猪島は手を振っていた。しかしそこで茶色い客車を牽いて我々を待っていたのは、真っ赤なディーゼル機関車だったのだ…。その日真岡鐵道の保有する C11 は JR 只見線に貸し出され、C12 は整備に入っていた。そこで JR からディーゼル機関車を1両借り受けて2両のディーゼル機関車で牽引、推進する列車として「DL もおか」なる運転が行われていたことは当日現地に行って初めて知った。今から思えば事前にホームページを調べておけばすぐ分かったものの、スマホも自分のパソコンも持っていなかった猪島は事前の下調べなしに私を”幻の”SL の旅に誘ってしまったのだった。下館のホームで啞然と立ち尽くす彼にかける言葉もなく、「まあさ、これも貴重なものか



もしれないしさ、とりあえず乗っていこうよ。」などと言ってみたものの、彼にしてみれば中学に入って初めて親からもらった四桁の小遣いから運賃を払ってこの DL 列車に乗る気にもなれなかつたらしく、その日はとにかく俯くままの彼に引きずられるように、そのまま踵を返して帰路に就いたのだった。

あれから 16 年。今日、私は陶芸雑誌の取材で記者さん、カメラさんと益子の窯元へ来ている。秋晴れの高い空の下、そこだけ異界を目にするかのように暑い陶芸窯を覗く取材は午後までかかり、その後は自由解散になった。行きに一緒にやって来た記者さんは次の仕事があるからというのでカメラさんの車に乗って東京にとんぼ返り、一人益子の駅前に立った私はススキ雲の見下ろす駅舎で、時刻表を見上げた。15 時 01 分、あと 10 分で列車が来るというが、それがなんとあの SL 列車だということではないか。遠くから狼煙のように煙が近づき、非電化の駅に小さなタンク車が滑り込む。指定席の券面に示された座席に腰掛け、私は今猪島の敵討ちをしている気分になっていた。どうだ、見ているか！ ついに乗ってやったぞ。これが SL ってやつだ。下館までは 1 時間弱。16 年来の敵討ちというには何となく物足りなく感じたのか、折角だから真岡線に全線乗ってから帰ってやろうという気になり、15 時 56 分に下館に着いた後私は SL 列車を使って運行される折り返しの 16 時 03 分下館発真岡行き客車列車に乗車、さらに真岡で茂木行き気動車普通列車に乗り継いでいた。

途中列車がやや遅れて真岡鐵道の終点、茂木駅に着いたのは 17 時 25 分。昼間は SL 列車に乗って来た子供たちでにぎわっていたであろう転車台や駅舎の階上デッキもすっかり静まり、落ち葉が積もるデッキの入り口はチェーンで立ち入り封鎖されている。こんな駅で今降りてもなあ…と折り返しの時刻までと外に出た私を、しかし思いもよらぬものが捉えた。目の前、小さな駅前広場を挟んだところに踏切があり、その左手に真岡鐵道よりもはるかに古びた駅舎が立っているではないか。駅舎入り口に立つと「奥武線 茂木駅」とある。奥武線…その言葉はもう 10 年も前の私の記憶を鮮明に思い起こさせるに十分だった。大学の一年次の頃、かつて浦和で創作に励んだという若き日の曾祖父の記憶を辿りに新宿から乗った電車、あれが奥武線だ。浦和の老舗写真館で曾祖父の話を聞かされてからしばらく私の中で洋画を描きたいという欲望が湧いていた時期があったが、その願望は真に才能のある同級生たちの作品を前に、何か月もせずにあっけなく消えてしまった。でもこの「奥武線」という言葉のまとう、私にとっては若き日の美術への憧れを確かなものにしてくれた、それまでは猪島の受け売りのような形で何となく足を踏み入れたに過ぎなかった美大という中で自分の立ち位置を探し出す一つのきっかけになった、その道標のごとく脳裡の片隅で常に私の進む道を指し示しているような響きは、知らずと私を深く心地の良いところに包み込んでくれた。それはまた、益子に来てから猪島のことを思い出すにつけ抱いていた、「こんないい加減なことで美術に進んだ自分がどうにか生き残って猪島のような才能のある奴が浮かばれないなんて」という、自らへのコンプレックスと、申し訳なさともやるせなさとも言えないドロドロした気持ちを、この「奥武線」の 3 文字が、「お前には美術に生きた曾祖父があり、お前は自分でこの道を選んだんじゃないか」と肯定してくれるように思えたからなのだろう。

はてさて、しかし今目の前にある奥武線の駅は、10 年前に新宿から乗った都会の通勤電車然とした風景とは打って変わって地方のローカル線そのものだ。線路も単線でいつ列車が来るともしれない 2 条のレールからはただただ熱気だけが伝わってくるようだ。PASMO をタッチして改札に入り、駅ホームに上がって二度驚いた。目の前にさっき SL もおかで乗った客車よりも数段古い、茶色い木の床の客車が停まっているではないか。いやいや、一応は同じ奥武線、新宿や浦和を走っているのと同じ電車ではないとしても、さすがにこれは夢でも見ているのだろうか。キツネにつままれるような思いで客車に私は客車に足を踏み入れたのである。一体何千何万の人を運んできたのだろうという、古びてなおサファイアのように青く輝くモケットに深く腰を沈め、木枠の窓から外に目を遣る。通学帰りと思しき高校生が 4、5 人乗ってくると遠くで発車の笛が鳴る。駅員がホームを走って客車のドアを締め切ると再度笛を吹鳴、前方から連結器が伸びる振動がガチャガチャと伝わり、ホームの屋根が、ベンチが、窓枠から見える全ての景色が後ろに流れ出した。

17時34分、列車は茂木を出ると山肌に沿った単線をゆっくりと走っていく。本当か？これがあの奥武線か？だとしたらこの路線は一体どこへつながっているのだろう…。途中大きなカーブのあるところで前方を見ると、4両の旧型客車の先頭には朱色のディーゼル機関車がついているようだ。しかし昔真岡鐵道で見たのよりは一回りも二回りも大きく、寸胴なボディから黒々とした煙が上がっている。そしてカーブのところどころでその朱塗りの缶に今まさに山陰に落ちようという真っ赤な夕陽が照り付け、私の目を焦がす。



右に左にカーブの続く山道を行くと突然視界が開け、那珂川の上に架かる橋に設けられた茂木中川駅に到着した。茂木にいた時には感じなかったが、すでにホーム上を照らす裸電球が明るい。間もなく反対側のホームに光の筋が差し込み対向列車がやって来るがそちらは草色の電車の4両編成。新宿を走る奥武線のエメラルドグリーンとは色も編成の長さも随分と雰囲気が違うが、それでもどうやらこの線の全てが客車列車というわけではなさそうだ。対向列車を待避して少しすると、また何の放送もなく列車がゆるゆると動き出す。周りを見渡すと茂木で乗った何人かの高校生は皆茂木中川で降りてしまったのだろうか、最後尾の1両には私一人。西の空は次第にあかね色から紫へと変わり、その上からしずしずと、藍色の夜が追ってくる。気づけば車内の明かりは全てオレンジ色の白熱灯。ニスの香りもわずかに漂う車内は次第に甘やかな餡色に染め抜かれ、台車がレールの継ぎ目を踏む音だけが規則的なリズムを刻んでいる。途中小さな駅か、信号場を通り過ぎた。特に案内もないので名前も分からぬが、徐行して通過する窓から後ろに流れて行く赤色の信号灯が、そこに分岐器があることを知らせてくれる。夕闇が覆い一面蒼く沈む下境の駅には17時51分着。いよいよ窓の外もほとんど見えなくなったが、この下境の駅を出ると列車は心なしか足を速めたようだ。レールの継ぎ目も先程までと違って目立たなくなり、左手の夕陽も見えなくなったのでふと思いついて反対側の車窓を見てみるといつの間にか線路は複線になっている。そう、この行先も知れぬ列車の走る線路は下境の駅を境に線路状況が良くなっているのだ。

次第にスピードを上げる列車から外を見遣り、私ははたと我にかえった。私は沈む西陽を左手の車窓に見ながら呆けていた。ということはもしかするとこの列車は北に向かって進んでいるのではなかろうか。全く駅の案内も行先の案内もないこの不思議な列車は一体どこに向かっているというのか。ちょうど車掌が廻って来たので捕まえて聞く。「え、お客様新宿までですか！この列車は下り列車の大田原行きですよ。そうしましたら、次の烏山で降りて頂いて上り快速列車にお乗り換え下さい。19分の待ち合わせで上りが来ますから。」悪い予感がまんまと的中したわけであるが、それにしても、真岡線のSL列車と同じかそれ以上に、良い旅ができたじゃないか。烏山のホームに降りると私を運んできた茶色の旧型客車列車は客の乗り降りがあるところだけドアを手動扱いし、また滑るように私の目の前を流れ、空の星も瞬き始めた田舎の駅に短い警笛をピッと響かせて、真っ赤なテールランプの光跡を溢しつつ闇の中へと消えて行った。

折り返しの列車を待つこと19分、駅の北方、暗がりの中に覗く黄色い4灯。猪島よ、僕はあの日二人で果たせなかった真岡線のSLに乗ったぞ！そしてその奥には奥武線が待っていた。僕が美術への道を決意した日の、あの奥武線だ。見ている！もうあれこれ考えず、僕は僕の成すべきことをするんだ。見ていてくれ！自分にも言い聞かせるように心の中でそう叫ぶと、私は明るい蛍光灯の光を落とす草色の気動車の、自動扉のステップに軽く足をかけたのだった。